

情報ファイルおよびパスファインダーの作成と活用

学習・情報センターとして学校図書館を使用する場合、手引き及び補助資料となるものなしに、学習に必要な資料を探し出すことは難しく、インターネットで調べようとしても、学習しようとする教材に適した資料が必ずしも見つかるとは限りません。

このような考えに立ち、より多角的な情報支援と実践的な利用の指導を通してメディア活用能力の育成を図り、学習に活用していくことができるように、次の研究を行いました。

- ①学習に関連するさまざまな情報を一定の体系にしたがって分類し保存・収納した情報ファイルやパスファインダーを作成する。
- ②実際の使用による効果と活用方法。

●実際の取組事例1

【情報ファイルを作成しよう：中学校】

（実践の流れ）

<授業で>

- ①ファイルする新聞を切り抜き、標目、見出し欄が印刷されたA4版のケント紙に貼る。
- ②件名以外の標目を記載する。

<標目>

件名	
日付	年 月 日
出所	

・日付は新聞の発行日、出所は新聞名を書く。

- ③見出しを付ける。



<図書委員会で>

- ①完成した情報ファイルを、件名を考えながら分類する。
- ②件名を標目に記入し、ケースに収納する。
- ③書架に情報ファイルコーナーを設け、ボックスに日本十進分類法に基づいて収納する。

（実践の工夫と成果）

件名を図書委員が考えることにより、生徒の興味・関心に応じた件名になりました。自分たちの作成したものが図書館に残ると生徒に意識させることにより、生徒は意欲的に取り組むことができました。

（今後の課題）

情報量がまだ少ないのでファイルを増やしていく必要があります。



●実際の取組事例2

【社会科での「資料探しのナビ」の活用：小学校】

（実践の流れ）

- ①姫路のお宝について調べることを確かめる。
- ②図書や「資料探しのナビ」を使い自分に必要な情報を探す。
- ③見つけた情報をよく読み、大切な点を短くまとめる。
- ④調べてわかったことを、発表し合う。

（実践の工夫と成果）

「資料探しのナビ」を活用することにより調べたいことを短時間で見つけることができました。

（今後の課題）

「資料探しのナビ」に載っていない情報も積極的に活用させたいと考えています。

《資料探しのナビ》

テーマ
姫路のまちのお宝
キーワード
姫路市 姫路城 祭り お城まつり ゆかたまつり

図書でさがそう

分類番号	書名	ページ	出版社
031	世界遺産ふしぎ体験大図鑑	14,15	小学館
031	グランド現代百科事典 23	419,420	学研
031	21世紀こども百科	228	小学館
090	ふるさとの思い出写真集 明徳大正昭和 姫路	9,124,162	国書刊行会
092	姫路百年	122,128	姫路市
093	姫路の祭り屋台	14~17	神戸新聞MOOK
095	天保の姿 姫路城	119,120	世界文化社
095	姫路城 水運の天守閣	304	神戸新聞総合出版センター
095	検証 姫路城 匠たちの遺産	305	神戸新聞総合出版センター
310	黒別荘史シリーズ 28 兵庫県	25,27	ポプラ社
519	修学旅行で行ってみたい日本の世界遺産①	24~27	岩崎書店
519	総合学習に役立つみんなの世界遺産②	38~41	岩崎書店
621	鳥獣図でみる日本の城	32~35	PHP 研究所

小中一貫体制の連携で取り組む「図書館活用教育」

松江市教育委員会

●中学校区で読書センター機能の充実

平成24年度、松江市の学校図書館は、小中一貫教育の「学園」で連携した体制を生かし、中学校区の図書館部会や学校司書会で共通教材を作り、各校で活用しました。

小中9年間でステップアップする「おすすめ本リスト」、利用指導で使う「マナー表」、学園で共通の「図書館だより」を発行するなど中学校区で連携した活動をしています。また、小学校で卒業生に貸出した本を中学校へ返却できるようにするなど、それぞれの中学校区の特性が生かされています。

こうした取り組みは、各校で読書センター機能が充実してきたことを実感できるうれしい結果だと思っています。



授業中に子どもの活動の情報を共有しあう
担任、司書教諭、学校司書

●ブロック研修会は学習・情報センター機能へ

昨年度末に策定した「図書館を活用する学び方の指導体系表～情報リテラシーを育てる～」を元にした年間指導計画を立て、学習・情報センター機能の充実にも取り組みました。

市立小・中学校50校を中学校区で8ブロックに分けて、授業研究の情報交換や、研修会を開いて学習指導要領と図書館活用教育についての必要性を確認しました。

図書館を活用する授業時数が増えるとともに、市立図書館と学校間で資料の相互貸借が活発になり、同時に物流システムの利用も盛んになりました。



自分の考えをまとめて伝える

●成果をアピールするという支援

学校図書館支援センターは、平成24年度から学校現場の学習・情報センター機能が充実することを中心に研修会、学校訪問、物流管理などの支援をしています。

また、学校現場からデータを収集してまとめ広報紙「RAINBOW」で発信することで、図書館活用教育の成果を広く知ってもらうこともしています。



広報紙で情報共有と発信

●今後の課題

今後は、各校の取組を各中学校区に広げ、図書館を活用した授業時数のさらなる増加、司書教諭を中心とした情報リテラシーのスキル指導の推進、すべての教科での図書館活用、ICT教育との関連づけられた指導など、図書館活用教育が深化することをめざしていきます。

図書館からの探究型学習支援プログラムの考案

2012年度の研究で見出した「学びのプロセス (T-model)」と、「探究型学習を支援するツール」を実践・検証し、どの教科にも汎用可能な学校図書館からの支援プログラムの考案に取り組みました。

●プロジェクト型学習での実践

研究対象授業：

同志社国際高校「コミュニケーション&メディア」
1998年より行われている、メディアの特性の理解と積極的な活用をもくろみ、情報の収集から発信の方法を実習し、またセキュリティーやネット・著作権など情報社会の常識についても考える、図書館を活用した科目。ツールや技術を学んだあとは、プロジェクトベースの学習で授業は進む。

対象：高校1年生(必修)

評価：“Pass or Fall”

【1学期】

コミュニケーションセンターを日常生活で活用できるように、オリエンテーションから始まり、コンピュータ利用の手引き、データ検索およびリサーチの基礎、情報倫理・著作権等に関して学びました。その後、グループでテーマを決めて多様なメディアからリサーチを行い、その結果をまとめ、最終回には自らの活動に対する自己評価も行いました。

【2、3学期】

グループでプロジェクト・ベースの学習に取り組む。図書館を活用する「知識・技術の習得」と、課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」を育成できるように今年度は、以下の課題を行いました。

(※AからFの過程は「T-model学びのプロセス」による)

(A)現在の日本、もしくは世界に点在する様々な問題からひとつを選び、

(B)その現状や問題の本質を調べ (C)自分たち自身で解決策を考案、

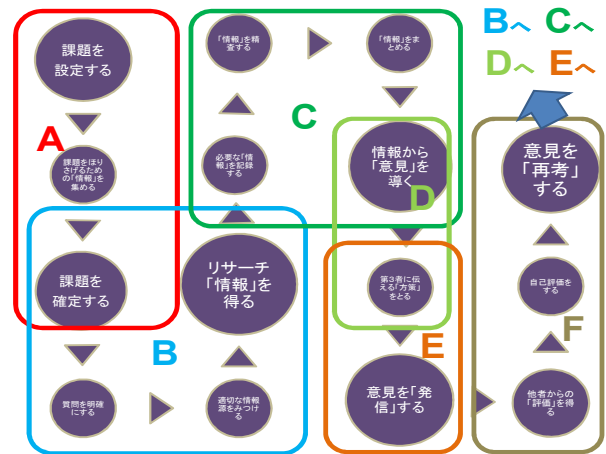
結果を(D1)パワーポイントで発表(2学期)

(D2)レポートの作成。(D3)ポスターを作成し、(E)ポスターセッションの場で提案する 《公開授業》(3学期)

(F)グループでの成果はクラス全体で共有、相互での評価

さらに、(F)をもとに再考察が行われるというのがこのプロジェクトの学びのプロセスとなります。

学びのプロセス T-model



授業の様子(プレゼンテーション)



●学習会の実施

日時:2012年9月1日(土)

場所:同志社中学校・高等学校

講師:山路進先生((一財)私学教育研究所)

参加者:8名

汎用性のあるプログラムの考案には、教育課程・学習指導要領に示されている「学力」の理解を深め、プログラムがその要求を満たすものかどうかの検証が不可欠だと考えました。

教育課程についての研究者に教育界の現状と今後についてのお話を聞き、学習指導要領への理解を深め、学校図書館との関連性について確認ができました。

●他校での実践の調査

原稿カリキュラムの中で探究学習の科目を設定している京都の公立高校2校を見学し、総合的な学習や各教科での実践への連携について伺いました。

見学① 京都府立嵯峨野高等学校

見学② 京都市立堀川高等学校



また、グループ内中学での図書館や教科センターを活用した授業実践を共有しました。各教科に、資料や授業教材を展示する「メディアスペース」というコーナーがあり、そのひとつの理科メディアスペースを見学しました。

学内見学 同志社中学校・高等学校



●授業見学会・意見交換会

日時:2013年2月26日(火)

場所:同志社国際中学校・高等学校

内容:6時間目授業見学(ポスターセッション)
意見交換会

参加者:23名

研究対象授業を素材として、「確かな学力」とはなにか、その育成のためにはどのようなことが可能かを参加者全員で考えるための、見学会・意見交換会を行いました。より多くの立場・人の意見を集約するために、研究会メンバーだけではなく、公開の形をとりました。

授業見学では、研究対象授業である「コミュニケーション&メディア」の授業「ポスターセッション」を見学しました。意見交換会では、研究授業担当者より、授業概要の説明の後、質疑応答の中でたくさんの質問・意見が出されました。



●探求型学習支援プログラム冊子の作成

研究授業を中心に、「学びのプロセス」を踏まえた「探究型学習」を手軽に取り入れるためのツール・プログラムを考案し、冊子にまとめることにしました。プログラムは6時間バージョン・3時間バージョンと2つ作り、取り入れやすいものを目指しました。

にま 邇摩高校で 自分の夢・未来をつかもう

—ともに学び、ともに取り組む図書館活用学習— 島根県立邇摩高等学校

邇摩高校は2学期制の総合学科高校(全9学級)です。1年前期に農業、ビジネス、生活、文化、福祉の5つのコースについて学び、後期からは自分が選んだコース(系列)を学びます。自由に選べる科目が多く、100以上の選択科目が用意されているので、自分に合った時間割を作ることができます。少人数で学習する機会も多く、体験や実習を取り入れた授業も多い特色があります。

●図書館利用学習の増加

島根県の図書館活用教育推進事業による学校司書の全校配置で、本校にも学校司書が配置されました。これを機に電算化など館内整備を開始し、生徒や教職員に対する利用支援もできるようになりました。教科での図書館利用時数も次第に増え、平成24年度には250時間を数えています。これは司書未配置の平成22年度と比べると2.5倍です。

●教職員研修で指導方法を共有

図書館活用教育の推進を図るために、探究型学習や学び方スキルの指導方法などの教職員研修を行い、生徒がより効果的に学び、力をつけることができるよう工夫しています。この結果、「読む・聞く・話す」言語活動の日常化とともに、図書館等を利用した学習は生徒の興味づけ、やる気、自己効力感の醸成につながり、自己肯定感が高くなっていることが分かりました。



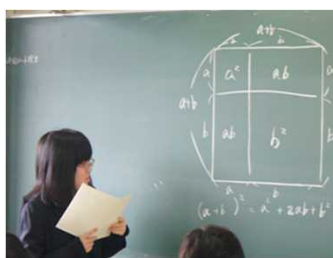
「産業社会と人間」キャリア教育とのコラボ 探究型学習のガイダンス「見つける・調べる・知る・伝え合う」を1年前期に実施

●言語力を磨く取り組み

活字に親しみ、進路などに対応できる幅広い学力を身に付けるため、全校生徒を対象に年3回の「読書週間」や、新聞記事を使った「NS(Newspaper Study)ノート学習」を行っています。「読書週間」中には集団読書テキストを利用し、全教職員が読書クイズを作成し、生徒が答えるイベントを行ったり、「NSノート学習」で読む新聞記事を課題研究でも利用したりする等、いろいろなところでコラボによる成果が表れています。

●授業例

「数学」
グループで解いた問題を発表しあう



「現代文」アニメーションの手法で読みを深める

図書館活動が常態化し、本の貸出やリクエストをする生徒も増え、図書委員会活動も活性化してきました。委員会主催のイベント(図書館まつり・クリスマスコンサートなど)には多くの生徒の参加がありました。図書館を利用した授業でも生徒たちは集中して取り組むようになり、こうしたハッピーサイクルができています。

平成24年度に作成した「学校図書館活用全体計画」をもとに、生徒たちの学びの深化や感性の伸長を支援できるよう、学校図書館から情報の発信を継続して行っていきたいです。

高校生の図書館利用行動を支援する、多様な図書館連携の試み

お茶の水女子大学附属高等学校

本校は、高等学校校舎がお茶の水女子大学のキャンパス敷地内に存在しており、近接する大学図書館を高校生も利用できる体制が、古くからとられていました。近隣には公共図書館もあり、生徒は各教科で課される資料を用いた課題学習等で、様々な図書館を利用していることが予測されました。

高校生ともなると、自主的に情報資源を使い分けて能動的に情報を探索する能力も高いことが想定され、学校図書館単館だけでは、生徒の真のニーズに応えきれないことも予測されます。しかし、実際に生徒がどのように図書館を使い分けて学習を行っているのか、その実態は明らかになっておらず、効果的な支援施策が検討できていませんでした。

そこで今回、高校生に対して実態調査を行い、そこで明らかになった図書館利用行動に即して、学校・大学・公共図書館等の各館種をより効果的に相互に使い分け学習できるよう、学校図書館が主体的に支援する連携施策を試みました。



→
高校生が大学図書館でグループ学習を行っている様子

● 高校生の図書館利用行動の実態調査

高校生がどのように図書館を使い分けて情報探索を行っているか明らかにするために、本校生徒を対象に、フォーカス・グループ・インタビュー調査を実施しました。この手法は集団面接法の一つで、特定の属性に適合する被験者に自然な議論を行ってもらった中から、本意の発言を抽出する質的調査法として知られています。



↑ 実態調査の様子



(左上)千代田区立日比谷図書情報館見学
(右上)国立国会図書館見学
(右下)印刷博物館およびライブラリー見学

● 館種ごとの特性理解を高める体験学習

調査の結果、生徒は複数の図書館を使い分けようと試みつつも、生徒のニーズと各館種毎のコレクションやサービスがマッチせず、情報探索に失敗し失望感を抱く経験を多数もっていることが分かりました。(例えば、小説を求めて大学図書館に行ったが全然所蔵されておらず失望し、肝心の調べ学習で専門書が必要な時にも使わなくなる等。)そこで、各館種がどのような資料に強く、どのような場面で使うのが有効なのか特性認識を高めるべく、実際に5つの館種を体験する学習を実施しました。学校・大学図書館は情報科の授業の中でレクチャーを行い、国立・公共・専門図書館については、現地訪問して見学を行う図書館見学実習を実施しました。

● 人的連携とシステムの連携の推進

生徒の理解促進だけでなく、教職員自身も相互の館種の現状を情報共有し、適切に生徒を誘導できるようにすべく、学内連携体制を構築しました。「大学図書館・附属学校図書館連携ワーキンググループ」を設立し、日常的な情報共有のほか、高校の新入生オリエンテーションに大学図書館員に直接来てもらいガイダンスをして頂いたり、大学図書館の大学生スタッフに学校図書館業務を補助してもらうなど、多様な連携を試みています。

その他、学校図書館システムに、公共図書館・大学図書館との連携機能を設けるよう仕様策定を行うなど、高校生の情報探索行動に即したあべき連携の姿を模索しています。

← 大学生インターンによる学校司書業務補助の様子

先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース

サイトURL <http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/> 東京学芸大学学校図書館運営専門委員会



● 教員のサポート機能強化の4年目の研究

学校図書館の教員サポート機能強化を目指して、2009年に立ち上げた「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」(以下「Webサイト」という)は、学校図書館の授業での活用事例を収集し、公開して4年目になります。今年には以下のような研究課題に取り組みました。

- ・Webサイトの各教科・領域事例のさらなる充実
- ・図書館活用実践事例の教育改善効果を検証
- ・Webサイトの活用拡大をねらった広報の方法

● 実践事例の校種別内訳 (2013.3)

幼稚園	小学校	中学校	高校	計
3	61	50	28	142

学校図書館の授業での実践事例については、2013年3月末現在で各教科・領域に2事例以上が掲載されております。

校種別の実践事例数の偏りについては、教科の特徴や附属学校の校種の数に関係してはいますが、少ない分野に関しても収集に努めていきます。そのために「事例協力のお願ひ」に関する説明や入力フォーマットに改良を加え、学内外へ広く協力を求めていき、データベースの更なる充実を目指します。

● 図書館活用事例から教育改善を導く

「調べる」学習では、図書館が提供する資料や資料情報が、児童・生徒にとっては興味、関心を促し、教員にとっては教材の発掘、授業の改善を促すきっかけとなります。

事例には資料情報が双方の視点で表現されています。

【附属学校司書教諭があげた特徴的な実践】

- ・調べ学習前の動機づけのブックトーク事例
 - A0002 小5理科 天気の変化
 - A0085 小5理科 人の誕生
- ・図書館を場として活用し、生徒作品を掲載
 - A0062 中2家庭 幼児のおもちゃづくり
- ・文系女子が興味を持つ絵本の活用
 - A0081 高2数学 漸化式

● 広報の拡大—SNSの活用

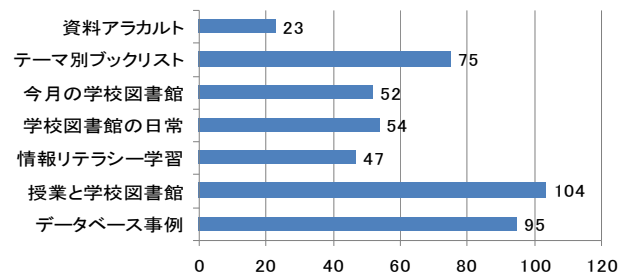
教育系の研究会等へチラシ配布を拡大し、公式のTwitterとFacebookを始めました。「実際に事例をもとに自校でも試みてみました。」という嬉しい情報も寄せられています。



● アンケート結果と今後

利用者へのアンケートは、Webを通じて154名から回答を得ました。データベース事例を上回る件数が「授業と学校図書館」のコンテンツにあり、授業活用への関心の高さがわかります。

よく見るコンテンツ(複数回答)の件数



今後もwebサイトの活用と事例協力を呼び掛けていきたいと思ひます。なお、報告集は大学附属図書館リポジトリで公開しています。